

まえがき

シンジルト SHINJILT

この報告書は、熊本大学文学部・総合人間学科・社会人間学コースの社会調査実習（通年授業）をうけた16人の学生が、授業の一環として、長崎県壱岐市（島）において行なったフィールドワークで得られたデータに基づいて書かれたものです。

社会調査という便利な日本語の表現のもとで、どこでなにを調査対象にしても良かったかもしれませんが、今回われわれは、壱岐という地域社会に、焦点を絞りました。壱岐で生起するさまざまな事象をなるべくマイクロ（民族誌的）に記述し、それらの事象がもつより一般的な意味を見出そうとしたのが、調査チームの目的でした。

そこでわれわれは、壱岐の島民が自ら経験してきた歴史や現在おかれている社会的な状況をいかに理解し解釈しているかということに、特に注目しました。ここでいう歴史や社会的な状況というのは、もとより独立した個別のものではなく、常に作用しあうものであります。またそれらは、島自体だけではなく、日本という国だけでもなく、東アジア、延いてはユーラシア大陸の過去や現在に密接に連動してきたダイナミックなものであります。

「近代」以前、日本にとっての「外国」、したがって「世界」というのは、現在でいう日本海の反対側にある諸々の政治実体との関係において認識され、形作られてきました。壱岐は、ユーラシア大陸と日本列島をつなぐ島として、昔から地政学的に重要な位置を占めてきました。13世紀には、ユーラシアを制覇していたモンゴル帝国の一派である元王朝から侵攻を受け、甚大な犠牲を出しました。壱岐には「元寇」をめぐる遺跡、伝説や禁忌などが、今でも数多く残されています。

壱岐と元寇との結びつきは、単に過ぎ去った歴史に止まるものではありません。むしろ、現代の社会的なコンテクストの中で注目され、特に21世紀に入ってから、両者の関係はより活性化してきました。「神風」に飲み込まれた10数万人の「元寇の魂（霊）」を慰めるために、島民はもとより、元寇に抵抗した英雄の末裔とされる人々、そして駐日モンゴル国大使、さらには九州在住のモンゴル人留学生など島の内外から多くの人々が招かれ、「元寇720年記念事業」といった元寇をめぐる事業が行なわれてきました。

われわれの調査チームは、まず、こうした事業に着目し、当事者たちに対するインタビュー調査および現地での文献資料収集を行なうことで、その詳細な経緯やそれに関わった人々の想いを解明してきました（第2部）。そして、こうした事業が行なわれるまでの壱岐における千人塚や蒙古の碇など、日常生活に埋め込まれていた元寇をめぐる諸事象や事物の位相を確認し、それらをめぐる島民の民俗知識を分析することで、事業が依拠する社会的土壌を描き出そうとしました（第1部）。さらに、こうした事業が行なわれたことによって、島の日常生活、風俗慣習、社会経済、歴史認識、国際交流にどのような影響をもたらしたのかを、とりわけ観光というキーワードを手

1 壱岐のコンテクストで言う「元寇」とは、13世紀壱岐島に侵攻してきた人間集団（具体的に、南中国・朝鮮半島・モンゴル高原出身の人たち）を指すと同時に、その侵攻によってもたされた一連の悲惨な歴史的出来事に対する汎称でもあります。

がかりに考察してきたのです（第3部）。

本調査報告書は3部構成となっており、調査チーム内部の3つの班のデータにそれぞれ対応するものであります。チームを班分けするまでに2ヶ月もの時間がかかり、それまで、各個人による調査プランの練り直し作業を繰り返してきました。また、各班の調査プランに対する検討作業やフィールドワーク技法に関する学習も、約1ヵ月半の時間を要しました。さらに、本調査を終えてから、データ整理や分析、民族誌の執筆作業を行なった後期においては、ほぼ毎回所定の授業時間を大幅にオーバーしながら、全員によるミーティングを行なってきました。こうした苦行に耐え切った学生にとっておそらくもっとも大きな収穫は、社会調査の大変さ、フィールドワークと観光することとの違いを経験的に知ることにあつたのではないかと思います。

五日間という短い期間ではありましたが、壱岐で本調査を行なったときの学生たちの表情はいつにも増して輝くものでした。それは、壱岐の悠久の歴史、美しい自然、優しい住民に直に接することができたからだと思われまふ。例えば、各班が行なつたいわゆる突撃インタビューにおいても、ほとんど拒否されたケースがなかったというのが、その好例でしょう。このように、現地調査の成功を保証してくれたのは、学内外の多くの人々のご支援とご協力によるものでした。2008年の予備調査に同行し、さまざまな助言をして頂いた同僚の慶田勝彦先生、本調査を温かく見守り壱岐で共に時間を過してくれた同僚の田口宏昭先生と松浦雄介先生に、まず、お礼を申しあげたいです。

それから、調査においてわれわれの執拗な質問に最後まで忍耐強く付き合っただき、多くの知識を教えてくださいました壱岐の皆さんの存在は、何よりも大きかつたのです。すべての方々のお名前をあげることはできませんが、下記の方々に、とりわけ謝意を表しておかなければなりません。芦辺合同海運株式会社の中村滋さん、芦辺町在住の小島満さん・重谷博さん・中村節子さん、あまごころ本舗株式会社の船川勝治さん・音嶋厚美さん・島永和敏さん、壱岐市役所の江口信さん・神崎照浩さん・出口威智郎さん、天手長男神社の谷口正博さん・立石士光さん、一支國研究会の山西實さん・喜多正さん・鶴瀬守さん、壱岐国ルネッサンス実行委員会の有馬黎子さん、壱岐市議会の大久保洪昭さん、壱岐市連合遺族会の山口貢さん、壱岐島荘の徳田成自さん、壱岐神社の後藤元伸さん、勝本町在住の石井敏夫さん、株式会社壱岐日々新聞社の種田拓さん、株式会社「壱岐の華」の長田浩義さん、郷土史家の松崎靖男さん、元寇720年記念実行委員会の白川永利さん・大皿川恵さん・大村竹光さん・渋村寛さん、興神社の里吉宏惟さん・山川光さん・山川昌英さん、新城神社の榊原昇さん、聖母宮の川久保匡勝さん、殿川酒店の殿川収蔵さん、長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所の宮崎貴夫さん、長崎県壱岐民宿協同組合の横山貞雄さん、松永記念館の定村隆久さん、原田酒店の原田美知子さん、MOCHAJAVA カフェの野本直子さん、龍造寺の植村高義さんなどであります。そして、追加調査にあたり、壱岐島外で行なわれたインタビューに、ご協力いただいた関係者、とりわけ熊本市在住の古賀幹人さん、福岡県筑紫野市国際友好交流会の斎藤法子さん、福岡県太宰府市在住のスチンゲルラさんに深謝いたします。

最後に、特筆すべきキーパーソンが3人います。調査チームのコーディネーター役とインフォーマントの役割を同時に果たしていただいた株式会社壱岐交通の伊佐藤由紀子さん。体調不良で入院していたにもかかわらず、一時退院してまで、われわれのインタビューに対応していただき、

貴重な資料データの数々をご提供いただいた元寇720年記念実行委員会の西村善明さん。壱岐における調査チームのスケジュール調整、インフォーマントの紹介、最終原稿の確認など、始終われわれの調査を力強く支えていただいた壱岐市教育委員会の市山等さんであります。この3人に恵まれなかったら、この報告書はできなかつたでしょう。常に元気で走り回り、壱岐の歩く百科辞典のような存在である伊佐藤さんのご活躍、いつも低い声でかつ自信に満ちた表情で島の歴史を語る自称「百姓」の西村さんのご健康、壱岐の文化行政に長年携わり、地域の歴史や民俗に造詣の深い市山さんのご多幸をお祈りして、謝辞に代えさせていただきます。